「平成29年度『学びのスタンダード』推進事業」の推進地域の取組

パイロット校名	小野町立小野中学校，小野新町小学校
推進協力校名	小野町立飯豊小学校，浮金小学校，夏井第一小学校

未来を担う子どもたちに確かな学力を身につけさせるために

～「授業スタンダード」を活用した授業改善・指導力向上への取組～

1　推進地域における「授業スタンダード」の活用について

（1）日常的な活用について
①掲示したり週案に綴じ込んだりするなどして，日常的な活用を図る。
②　授業の構想や振り返りでの，教師同士の意見交換の際の資料とする。
（2）互見授業について
①１時間の授業すべてではなく，ポイントを絞った授業の公開を積極的に行い，教員同士の相互研修を深める。

2　パイロット校の取組内容

小野中学校（パイロット校Ⅰ）

（1）「授業スタンダード」の活用について
①すぐに見られる，使える環境づくり
○いつでも，すぐに見られるように職員室の壁に拡大版を掲示した。
○週案にリーフレットを挟み，毎週「チェックシート」による反省を綴じ込んだ。
②　研究副主題「課題意識を持った『授業スタンダード』の積極的な活用」
○「授業前に」：単元をつくることでねらいや指導事項などを明確にすることを目的として単元構想表（国語科），単元指導計画（数学科）を作成し，授業に臨んだ。
○「授業後に」：授業後の板書を写真で記録し，授業の振り返りに活用した。
（2）パイロット校の指導体制に関する具体的な取組について
①　ＴＴ授業の実施
○国語科では，全ての学級においてＴＴの授業を実施した。
○Ｔ１とＴ２において，機能的な役割分担の明確化を図った。

Ｔ１	１年担当Ａ教諭	２年担当Ｂ教諭	３年担当Ｃ教諭
Ｔ２	学びのスタンダード推進教師		

（3）推進教師の役割と具体的な取組
①　「研修だより」の発行
○「研修だより」の発行を通して，各種セミナーの伝達講習だけでなく，本校が取り組んでいく研究の方向性や捉え方などの話題提供に努めながら，共通理解を図った。
②　互見授業の励行
○初任者研修での授業づくりや研究授業を通した，多面的な助言を活かした研修の充実
○「授業を見る，見てもらう」といった観点に絞った担任外による道徳の授業実践
③　推進地域協議会や町学力向上推進事業との連携
○「研修だより」を通した推進地域協議会（年５回）の報告と共通理解
○小・中交流授業研究会への積極的な参加計画づくり
④　学習コーナーの充実
○各教科で展示されている作品の管理
○掲示物や学習プリント等の整理整頓

小野新町小学校（パイロット校Ⅱ）

（１）研究計画及び指導案への「授業スタンダード」を基にした視点の位置づけと実践

①　導入，展開１，展開２，終末の４段階設定（以下，視点設定の例）

導　入	【子どもの「問い」や「思い・願い」を引き出し，課題意識をもたせる】 ・　前時までに学習している速さを求める公式と道のりを求める公式を確認した上で，本時の学習課題につなげ，「できる，できる，あれ？」の問題提示により児童の問いを引き出し，課題意識をもたせることができるようにする。

②　「授業スタンダード」に関連する事項の指導案への明示

８　学習過程　　**＊太字ゴシックは，「授業スタンダード」との関わり**

学習活動　Ｔ発問　・予想される反応	時間	○教師の支援　◆評価　■授業テーマとのかかわり
１　前時の学習を振り返り，本時の学習課題をつかむ。 Ｔ　3時間に６３０ｋｍ走る新幹線の速さは? ・　６３０÷３＝２１０ 時速２１０ｋｍ	５	■　前時までに学習している速さを求める公式と道のりを求める公式を確認した上で，本時の学習課題につなげ，**「できる，できる，あれ？」の問題提示により児童の問いを引き出し，課題意識をもたせることができるようにする。**　【手立て　導入】

※　今年度は，教科指導を受け持つ教員２０名全員が「授業スタンダード」を基に指導案を作成し，授業研究に取り組んだ。

（２）タテ持ち，ＴＴ指導等

①　理科のタテ持ちについて

○学級担任外の２名で，４～６年生の１組と２組の理科を受け持って指導に当たった。

A教諭	４年１組	５年１組	６年１組
B教諭	４年２組	５年２組	６年２組

【４~６年の各１組を担当するＡ教諭】

○担当する２名で教材研究を共に行い，共通の資料を活用し，効率的かつ有効な手立てに配慮しながらの取組ができた。

②　ＴＴ指導について

○今年度は加配を受け，担任外の教務部が４名となった。その４名が，分科以外に算数科を中心として全学級にＴＴで入った。

低学年	担任，A教諭	D教諭 ※D教諭は，高学年を基本としながら他学年にも適宜支援に入る形式
中学年	担任，B教諭	
高学年	担任，C教諭	

③　推進教師の役割と取組

○「学びのスタンダード」推進事業にかかる連絡調整事務

○校内現職教育にかかる一切，授業づくりの推進

○分科，ＴＴ関係（書写，低学年算数科を中心としたＴＴ）

○研修に係る連絡調整事務（経験者研修Ⅱ，フォローアップ研修，専門研修）　等

３　推進協力校の取組内容

（１）飯豊小学校の取組について

①　活用計画

○児童の「学ぶ姿を育てる」ことをねらいとした「わかる・できる授業づくり」に向けた授業改善と指導力の向上

○児童が主体的に問いに向き合う場，児童の考えを大切にした学びの場の設定

②　活用の実際

第４学年　算数科「変わり方調べ」による実践

○主体的に問いに向き合う場の設定

・デジタル教科書を使って視覚的にも分かりやすく問題を提示する。

・問題を解かせることで，「できる」「できる」「あれ？」といった驚きが感じられる導入を工夫する。

○児童の考えを大切にした学びの場の設定

・自力解決を終えた児童は，ペアで互いの考えを説明し合うなど，多くの児童が自分の考えを表現できる場を設定する。

・自分の考えを全体に広げる発表の場面では，実物投影機を使って児童のノートをモニターに映し，可視化する。

【ペア学習の様子】

○「わかる」から「できる」への学びの連鎖

・まとめを行った段階で第１回目の学習の感想と自己評価を書かせ，適用問題を解いた後に第２回目の自己評価を行わせることにより，達成感を味わわせたり，学習内容の定着を図ったりする。

（２）浮金小学校の取組について

①　活用計画

○課題設定の場面で問いを引き出し共有するための「授業スタンダード」の活用

○話合いのコーディネートするための「授業スタンダード」の活用

②　活用の実際

展開の場面で子どもたちの気づきを共有し，課題解決に向けた話合いができるように，教師が子どもたちの思いや考えに寄り添って話合いをコーディネートしている。

【友達の思いに寄り添う児童の姿】

（３）夏井第一小学校の取組について

①　活用計画

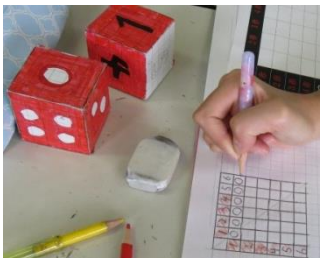
○児童から「問い」や「思い・願い」を引き出すための魅力あふれる教材提示の工夫

○課題を追求・解決するための子ども同士が聞き合う活動の工夫

○新たな学びにつなげるための振り返り活動の計画的位置づけの工夫

②　活用の実際

第６学年算数科「順序よく整理して調べよう」の単元では，記録の分類整理を通して起こり得る場合を求める学習に取り組んだ。「予想外の結果からの問題解決の導入」の活用により，試行錯誤しながら理解を深め，達成感や学ぶ楽しさを味わうことができた。教材提示の仕方の工夫により，児童の学習意欲を引き出し，主体的な学びへと実現した。



【記録の分類整理】

第５学年理科では，実演により「ニワトリの心臓の観察」に取り組んだ。実際の心臓を観察することにより，予想との違いに驚いたり，心臓の構造が分かったりすることで，他の動物の心臓も見てみたいなどの好奇心あふれる児童の姿があった。

４　成果と次年度へ向けて

【学び合う児童の様子】

（１）成果

①　共に学び合う集団づくりに関わる取組等により，子どもたちは友達と関わり合いながら集団で学ぶ喜びや楽しさを見出してきている。

②　教師としては，「単元をつくる」ことの重要性や授業づくりの視点について改めて深く見直す機会となった。

（２）次年度に向けて

①　視点を絞った略案での教師相互の参観などにより，日常的な「互見授業」を実践できるようにしていきたい。

②　導入の工夫や学びの場の設定により「主体的・対話的な学び」の実現をめざしてきたが，さらに「深い学び」を実現するために，児童の思考に寄り添い活性化する指導力の向上に向けた研究を進めていく必要がある。

平成２９年度現職教育だより　（正式名称：“Progress（進歩）”）

学ぶんジャー通信

発行日 2017.9.22

小野新町小学校
現職教育研究部

文責：桑澤　隆

【現職テーマ：学ぶ喜びや楽しさを感じ，共に高め合う授業の創造】

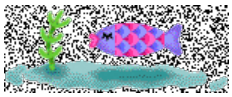
２学期の現職では、５年１組とあすなろ２組での授業研究会、公開授業にかかる指導案検討会等に取り組んでいただきました。お忙しい中、ご協力いただきまして本当にありがとうございました。１０月の研究公開まで残り一ヶ月。今後もご協力をお願いします。

◆１０月の研究公開へ向けて◆

別紙で示しますが、１０月の研究公開へ向けて取り組んでおきたいことなどをまとめましたのでご確認ください。各種コンクール、新小まつり等様々な行事が今後も目白押しでお忙しい中ではありますが、全職員での取り組みをお願いします。

（研究公開までの現職の計画等）

９月２０日（水）	公開授業案第２次案提出
９月２２日（金）	職員会議：研究公開までの取り組みについての確認。
９月２５日（月）	２次案の検討終了・要項用授業案作成完了→起案
２５日～	環境整備等を順次進めていく
９月２６日（火）	２次案・要項印刷開始
９月２７日（水）	要項丁合・製本（事務所送付用に指導案原本集も作成）
９月２８日（木）	要項等を町教委・県中教育事務所へ送付
９月３０日（土）	塩竈神社例大祭　御神輿担ぎ男性職員４名参加
１０月　２日（月）	杉の子１組ブロック検討会　１５：１０～
	杉の子１組教室：教頭、藤井、佐藤幸、服部、桑澤（＋支援員）
	※吉田先生は宿泊学習引率のため欠
１０月２日～４日	５年生宿泊学習：校長、関東、山内、吉田美、大和田奈
１０月１０日（火）	現職教育全体会　１６：００～
	授業研究会当日の役割分担等の再確認。→確認後、各部等の活動。
１０月１８日（水）	学習指導法研修会
	本校では体育部の授業研究会　授業者：関東先生
１０月１９日（木）	ブロック授業検討会・事後研究会　杉の子１組（５校時）
	指導助言者：佐久間指導主事
１０月２３日（月）	公開準備
１０月２４日（火）	**研究公開**



◆１０月２４日の下校時刻等について確認◆

○　授業を公開しない学級
　　１２：５０　下校
　　１３：００　スクールバス出発

○　授業を公開する学級
　　１４：３５　下校
　　１４：４０　スクールバス出発

○　１０月２４日の時数は全学年４時間となっていますが、公開する学級の時数は５時間となります。

※　１０月２４日は全学年弁当日。４校時限。

◆公開授業案検討会で出された質問等について◆

①「手立て」と「導入」・「展開」の２種類があったが、統一した方がよいのではないか。

→　今年度初めに６年２組で取り組んでいただいた際に「導入」・「展開」という流れができたのですが、現職教育部として提示した授業案の様式には、「手立て」として示したため混乱が生じました。授業スタンダードを意識した場合、「導入」・「展開」とした方が参観する方々にわかりやすいので、そちらに統一します。ただし、特別支援学級の授業案に関しましては、複式でもあり、区切りが難しいので「手立て」としての表記をお願いします。

②「話し合いを通して高め合う」のか「多様な意見を出し合って高め合う」なのか、どこに重点をおくべきなのか。新小として「これ」というのがあるのか。

→　質問にあるような、２者択一の問題ではなく、どちらも相互に関連し合っているものであり、学習内容や学年・学級の実態によっても変化するものではないでしょうか。

　例えば、１年生で話し合いを通して高め合うことは難しいことですし、高学年であれば、多様な意見を出すだけではなく“吟味”するための話し合いが必要となります。また、複合図形の面積を求めるといった学習内容であれば、“吟味”というより、多様な考えに触れることに重点が置かれるものだと思います。

→　「対話」に関する事項については、６月に配付した現職教育計画の３ページに研究主題のとらえ方（２）や、目指す児童像として４ページにたたき台としての案を提示してありますので、ご確認ください。そして、研究のまとめの際にブロックでの話し合いの機会を設けたいと思いますので、話題にしていただき、ご意見をいただきたいと思います。次年度の研究に反映させるべく、ご協力願います。

◆桑澤が全学級に入るT・Tについて◆

以前予告しましたように、全学級に入らせていただきます。

○　授業スタンダードチェックシートの活用を推進します。

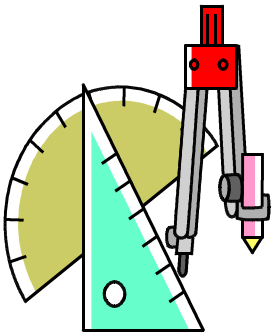
・　前の週に，曜日と何校時目かを相談。その際，授業スタンダードのどのあたりを意識するかを確認し、チェック項目をしぼる。

・　Ｔ・Ｔに入らせていただいたその日のうちにＴ１，Ｔ２でいっしょにチェック。

・　チェックをもとに今後の取り組みについて見通しを立てる。

○　Ｔ・Ｔに入る日程など。

・　第６学年から順次入らせていただきます。
　来週中に６の１、６の２！です。



平成２９年度現職教育だより　（正式名称：“Progress（進歩）”）

学ぶんジャー通信

発行日 2017.11.20

小野新町小学校
現職教育研究部

文責：桑澤　隆

【現職テーマ：学ぶ喜びや楽しさを感じ，共に高め合う授業の創造】

新小まつり終了となり，少しホッとされましたでしょうか。研究公開から引き続いての大きな行事でしたので，身も心も安まる暇がなかったことと思います。本当にご苦労さまでした。

さて，２学期も終盤となり，様々なまとめの時期を迎えます。教育相談後には通知票関連の事務に取り組むことになるかと思いますが，現職のまとめについても各自の学期末の事務計画に入れておいてくださるようお願いします。

◆研究のまとめへ向けて◆

各自の研究のまとめですが，現職計画では１１月２７日を提出日として設定してあります。年明けには，すぐに教育課程編成に目を向けていただきたいと思いますので，早々に研究のまとめを作成していただきたいと思います。（冬休み前には修正案まで完成を目指しましょう。）

研究のまとめ方については，６月に配付した現職計画（緑の表紙）に例示してありますので参照してください。不明な点については随時担当（桑澤）に相談願います。

「まとめ」の提出は，まず紙媒体でお願いします。また，データを現職教育フォルダ内に作成してある“まとめ”フォルダに各自保存してください。

（今後の現職の計画等）

１１月２２日（水）　小野中学校スタンダード研究公開
１１月２４日（金）　小野町学力向上推進事業「授業研究会」（飯豊小学校）
１１月２７日（月）　研究のまとめ提出（第一次）　※二次〆切を後日設定します。
１１月３０日（木）　２校時　５年２組授業研究会（鈴木先生）「四角形と三角形の面積」
１２月　１日（金）～　８日（金）　第２回算数アンケート実施
　　教職員の本研究に関するアンケートも実施
１２月２０日（水）　現職推進委員会→２１日（木）へ　※ 水曜日に会議をもたないようにするため。
　　現職推進委員会（研究のまとめについて）
１月　９日（火）　研究概要提出
１月１０日（水）～１２日（金）研究物作成作業（推進委員を中心に）
１月１２日（金）　現職推進委員会
１月１５日（月）　研究物（本論編・資料編）完成
１月１８日（木）　研究物審査会
２月上旬　現職推進委員会（今年度の反省・来年度の研究について）
３月上旬　現職全体会（今年度の反省と来年度の研究について）

研究のまとめを作成する際に，現職教育計画に再度目を通してください。今年度は，授業スタンダードを基にした“教師の授業力向上”に主眼を置いた取組でしたが，次年度は，今年度同様授業力の向上を基本としながらも，児童に主眼を置いた研究へとステージを上げていきたいと思います。今年度設定した目指す児童像については，先日の研究公開のアンケートの中に「目標達成は難しいのではないか」との指摘がありました。先生方にもそのような視点で目指す児童像を点検していただき，より実態に即した目標設定へつなげたいと考えていますので，ご協力のほどよろしくお願いします。

⇕ 関連して

◆小野中学校の取組から◆

小野中学校が授業研究を進める上で，研究の中心に置いているのは「単元づくり」だそうです。授業スタンダードでは１ページ目の冒頭に「単元をつくる」と示されています。本校の授業案では，単元の指導計画を見直すなどして単元構想を表現している先生もおります。来年度は，小中連携及びパイロット校Ⅰ・Ⅱの関係も考慮し，より一層「単元づくり」を明確にした取組が必要になることと思います。22 日の研究公開では，「単元づくり」をどのように示して実践しているかを意識して参観してみてください。

◆矢吹聡先生より授業改善研修会の報告◆

平成２９年度　算数・数学科授業改善研修会
三春町立沢石小学校　９月２８日（木）

■　単元名「考える力を伸ばそう『きまりを見つけて』」（５年生　７名）

■　問題　　数え棒で正方形を作り、横にならべていきます。正方形を３０個ならべるとき、数え棒は何本必要ですか？

１導入

○　問題文を読み、問題が頭の中でイメージできたか、写真（図）を少しずつ見せていき、数え棒が何本使われているか正方形が４つまで確認することで、下位児童も「３」という数が関係しているのではないか、という見通しをもって課題に取り組むことができた。

△　上位児童にとっては簡単になりすぎてしまい、物足りなくなってしまったのではないか。

（写真の見せ方の工夫）

→問題との出合いは大切。具体物や半具体物を用いて問題をしっかりイメージさせることが大事。どの児童に焦点を当てて課題設定をするかが考えるポイント。

２展開

○　自力解決の時間は１３分。しかし、ずっと一人で悩ませるのではなく、５分程度経ったら「友達の考えを見たい人は旅立っていいよ」という声掛けをし、児童はほかの児童の解き方を見に行く姿が見られた。その間に一人で考えたい児童は考えを続け、聞きに来た児童に対しては考えを教えていた。

○　机間指導の時に教師が児童の考えを丁寧に見取っていた。図や表で考えている児童に対しては、「これは式にならない？」「いくつずつ増えているの？」と式に表すように声かけをしていた。

○　自力解決からそのままペアでの交流に移っていた。どちらから話すのかを決め、相手にノートを見せながら「まず」「次に」といった話す順番を整理しながら説明することができていた。

○　全体での話し合いは黒板の前に集めて行った。児童同士、教師との距離も近く、話しやすい学習形態になっていた。

○　「〇〇君と同じ考えの人やもう一度言える人？」といった働きかけや「この４ってどういうこと」と問い返しが見られ、教師が児童の発言を児童同士につなげて、うまくコーディネートしていた。

３終末

○　板書を振り返りながら今日の「ポイント」を児童から引き出させまとめにつなげていた。（本時だと「３ずつ増えている」）

○　表や数直線などのよさをまとめでも触れていた。

※　矢吹先生が参観した際のメモが記入された指導案等を添付しましたので参照してください。
※　授業スタンダードのチェックシートが指導案に位置づけられ，指導と評価の一体化が示されていることなど，いろいろ参考にしたいものがあります。

◆授業アイデア例の活用について◆

添付資料の中に，「全国学力・学習状況調査の結果を踏まえた“授業アイデア例”」があります。内容としては学力調査の結果を踏まえたものですので，正答率が低かった問題について取り上げ，指導の観点が絞られたものになっています。この資料については，該当学年のみで活用するのではなく，学年の実態に応じて内容を工夫し，全学年にわたって意識して取り組んでほしい旨が添えられています。お礼の手紙やスピーチなど，教科学習だけでなく，朝の会や帰りの会等で取り組めるものもありますので，一読され，実践に生かしてください。

研修だより

小 野 町 立 小 野 中 学 校
平成29年度 研修だより №1
平成29年 5月 9日（火）発行
文責： 長岩

第１回「学びのスタンダード」全体会議より

○　「学びのスタンダード」推進事業の目的
　これまで行われてきた「『つなぐ教育』推進事業」の成果である、学校・家庭・地域の協働・連携の成果を生かしながら、引き続き課題となっている教員の指導力向上を図っていく必要がある。
　そこで、「学びのスタンダード（「授業スタンダード」及び「家庭学習スタンダード」）を基盤とした、より質の高い授業や効果的な家庭学習の実践及び各学校における研修の充実に努め、教員の授業改善、指導力の向上を図る。

○　「授業スタンダード」の目的
　授業の基本的な流れや指導上の留意点、次期学習指導要領の主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善の視点等を盛り込み、教員一人一人の授業の質的改善と指導力の向上を図る。

○　「授業スタンダード」の活用について
・授業者と指導主事等の「授業のよりどころ」として！
・授業者のよさや課題を見極め、具体的な指導を！
・授業づくりや授業参観の視点として！
・教員の学び合いの促進に！

○　「授業スタンダード」の活用で期待できること
・「主体的・対話的で深い学び」の促進
・授業の質の確保とさらなる向上
・校内研修の活性化
・学校間格差の縮小

○　事業推進地域における実践内容
・パイロット校Ⅰ・Ⅱ、推進協力校それぞれの課題等の明確化及び事業推進地域の課題等の共有化を図る。（パイロット校Ⅰ：小野中学校、Ⅱ：小野新町小学校、協力校：町内小学校）
・「授業スタンダード」に基づく域内の研究の中心となり、年に１回程度、推進地域授業研究会を開催する。（開催校：小野中学校、小野新町小学校）

◎　「授業スタンダード」へ込めた思い
　困難な課題に対して多様な他者と協働しながら粘り強く取り組み、最適解を見いだすことができる力を子どもたちに育む必要がある。その力を育む場が、日々の「授業」である。

講演「これからの授業で大切にしたいこと～先生方へのエール～」

福島大学総合教育研究センター　准教授　宗形潤子

○　「主体的・対話的で深い学び」について
・主体的な学びとは、子どもたち自身が、この単元の中で見通しと目的を持って粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次の学びにつなげること。
・対話的な学びとは、人との対話や文章や作品との対話、自分の自己内対話などを手掛かりに考えること等を通じ、自己の考えを広げ深めること。
・深い学びとは、習得・活用・探求という学びの過程の中で、各教科等の「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かうこと。

☆　主体的・対話的で深い学び＝アクティブ・ラーニング
・頑張る学校応援プラン～ふくしまの挑戦と戦略～では、アクティブ・ラーニングを以下のように捉えている。
　『教員による一方的な講義形式の教育とは異なり、学修者が課題の発見・解決に向けて能動的に学ぶ指導・学習法の総称。主体的・対話的で深い学び。』

◎　「主体的・対話的で深い学び」を実現するために
　１単位時間の授業の中で全てが実現されるものではなく、単元や題材のまとまりの中で、例えば主体的に学習を見通し振り返る場面をどこに設定するか、グループで対話する場面をどこに設定するか、学びの深まりを作り出すために、子どもが考える場面と教師が教える場面をどのように組み立てるか、といった視点で実現されていく。

　上記の通り、ご報告させていただきます。
　また次号は、小野町学力向上推進員会で確認されたことや「授業スタンダード」の活用についてお知らせしたいと思います。

研修だより

小 野 町 立 小 野 中 学 校
平成29年度 研修だより №１１
平成29年６月１３日（火）発行
文責： 長岩

「本校の視点」について

これまで「学びのスタンダード」説明会や小野町学力向上推進協議会などから、さまざまなことについて考えてきました。これらの説明や講義の中で一番強調されてきたことは、「主体的・対話的で深い学び」ということです。以前にも研修だよりに載せたように「主体的・対話的で深い学び」＝「言語活動の充実」ということになります。これまでも「学び合い」ということで本校ならびに本町では、研究を進めています。

そこに今、「授業スタンダード」という取り組みの中から、本校がめざすものは何か、我々が取り組んでいくものは何なのかを考えていると……。こんな記事が記載されていました。

～ある新聞記事（日本教育新聞H29.6.12）より～

全国学力・学習状況調査実施の数日後、夕食時に妻が「今年の全国学テの算数の問題よく考えられているよね」と切り出してきた。新聞に掲載された問題を、脳トレ感覚で解いたとのこと。特にＢ問題からこれから子どもに求められる資質・能力がよく分かると、しきりに感心している。

学校の反応は？先日、校内研修としてわが校６年生の解答を自己採点し、学力の定着状況や課題について分析する機会があった。分析を通して、それぞれの学年での指導の在り方を振り返り、指導上の課題を共有する。ある職員は、「全国学テにもろ手を挙げて賛成するわけではないが、この結果は自分の指導を振り返る良い機会になる」と涙が出るような前向き発言。その中で、ある職員が「こんなひねくれた問題を解くには…」とつぶやく。聞くと、日頃の評価問題や授業での教材等からかけ離れた問題であり、全国学テ問題自体が異質であるとのこと。

確かに授業を参観していると教材文を音読することさえ、困難な子どもがいることも事実。前述の職員からすると「現実と理想のギャップ」からのつぶやきであり、多くの職員が心のどこかで感じているのも事実。教育行政からは、学力向上に向けての対策が最重要課題であると、校長会の度に指導が入る。管理職としてどう対応するべきか、いつも悩む。「家庭学習の充実」も大切だが、その前にすべき対応は数多くある。学校生活の約６割が授業時間であることを考えると、毎日の授業改善の積み重ねがポイント。「先ず隗（かい）より始めよ」である。

本校では研修主任が中心となって、日々の授業改善を図る職員室文化の醸成から始めていくことにした。職員も「頑張ろう」と意気込む。

「よし、これで行こう」と思った矢先、新たな施策が教育行政から通知される。どうやって、このことを職員が納得できるように説明するか。また、眠れぬ夜を迎えることになる。

（宮崎県公立小学校校長Ｋ）

そこで次のようなことを思いました。先生方は、これまでもいろいろな実践を重ねて自分の授業スタイルといったものを創り上げてきました。本校には、経験豊富な先生方がたくさんいらっしゃいます。中学校なので他教科の先生方が多いです。でも、ここに意外なヒントがあるかもしれません。それらを見て学んだり、自分の授業に活かしたりすることができたら、またひと味違った自分の授業スタイルができるのではないでしょうか。

まず、自分の授業づくりについて考えてみます。正直、その日一日を乗り切ることが精一杯で余裕が生み出せません。でも、授業はやらなければならないし、一番大切にしなければいけないということも分かっています。その中で、自分の授業を日常的に振り返る一つの指標として「授業スタンダード」を活用していると、授業を行う準備と振り返りを意識した授業づくりといったことになるのかな……と思いました。

１　授業を行う準備→「単元をつくる」ということから本時が生まれる。
２　授業の振り返り→「本時の板書・ワークシートなど」を用いて客観的に自分の授業を振り返る。

この２点を「本校の視点」として、「授業スタンダード」を考えてみようと思いました。いろいろな考え方があると思います。「主体的・対話的で深い学び」とか…、まずは「授業づくりと振り返り」といった日常的にできることから始めていくことではないかと考えました。

いつも思いつくままに研修だよりとして発行しておりますが、よろしくお願いします。また、ご意見・要望等ありましたら遠慮なく言ってください。

次号は、「単元をつくる」視点について考えてみたいと思います。

研修だより

小 野 町 立 小 野 中 学 校
平成29年度 研修だより №１２
平成29年６月２８日（水）発行
文責： 長岩

先日は、小野町学力向上教育講演会への参加ありがとうございました。講師の宗形潤子先生が講話の中で、「授業スタンダード」についても話されました。この「授業スタンダード」は大事なことが網羅されていて、丁寧に読むことで先生方の気付きや振り返りにつながるものである。ただ、全部をやることは可能だろうか。２つぐらいに絞って研修されるといいのではないでしょうか……と。

やはり、本校では前号でも述べた通り、下記の２つの柱から「授業づくりと振り返り」といった日常的にできる研修を進めていきたいと思います。

１　授業を行う準備→「単元をつくる」ということから本時が生まれる。
２　授業の振り返り→「本時の板書・ワークシートなど」の記録から客観的に自分の授業を振り返る。

今回は、「単元をつくる」という柱について考えてみたいと思います。

「単元をつくる」４つの視点

◇第１の視点：『ねらい（何を身に付けさせるのか）を明確にする』

「何を」には、学力の３要素である「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「主体的に取り組む態度」がすべて当てはまります。ねらいは、単元や授業の背骨です。背骨がしっかりとしていればぶれは生じません。

「何を（指導するのか、身に付けさせたいのか）」が先になります。そこがしっかりと決まれば、「どのように（指導するのか）」も決まってくるのです。すべての「どのように」は、ねらいを達成するために、ねらいに迫るためにあることを忘れてはいけないということです。

◇第２の視点：『生徒の実態を把握する』

授業に限らず、実態に合わない指導は効果を上げることはできません。また、教えることを明確にし、その授業にかかわる生徒の実態を把握することは授業づくりに欠かせません。実態把握は、授業の学習形態や方法等を決定するために必要なものです。

単元のねらいや１単位時間の授業のねらいを達成するために身に付けておかなければならない既習事項は何かをはっきりさせておく必要があります。そして、目の前の生徒たちが、どのような学びをしてきたか、どの程度既習事項が身に付いているか、どのような思考力がはぐくまれているかなど、知識・技能等の習得状況を個別に具体的に把握することが大切です。

◇第３の視点：『単元全体を見通した計画を立てる』

ねらいと実態が明確になったら、次は、単元の数時間の中で、どのような活動・内容をつなげていけば、ねらいを達成できるかを考えます。生徒の主体的な学びが単元を通して具現できるようにするためには、生徒の思いや願いを生かすことができるような活動を単発ではなく連続するように、工夫して構成していくことが大切です。

また、活動のねらいが本来のねらいとかけ離れることなく、身に付けさせたい力をはぐくむことができるような活動になっているのかどうかを考えることも大切です。

そこで、どのような力を身に付けさせたいのかを考えて活動を構想する際、忘れてはいけないのは、どのような教材を使うのかということです。教材研究を行う際、素材の特性を考えた上で、生徒に提示する教材を決めることが大切です。

さらに、評価と活動がつながっていることが大切です。単元全体を通して、教師はそれぞれの活動のねらいと、その活動によって身に付けさせたい力を再確認し、その活動にあった評価を計画することも重要となってきます。

◇第４の視点：『言語活動を組み入れる』

言語活動の充実は、各教科等のねらいである学習指導要領に示す目標や内容等を十分に実現するために行うものです。思考力・判断力・表現力等をはぐくむためにも効果的に言語活動を位置付ける必要があります。そこで重要になってくるのは毎時間でということではなく、最適のタイミングで言語活動を位置付けることがポイントです。

次回は、「授業の振り返り」という柱について考えてみたいと思います。

研修だより

小 野 町 立 小 野 中 学 校
平成29年度 研修だより №１３
平成29年６月２８日（水）発行
文責： 長岩

１　授業を行う準備→「単元をつくる」ということから本時が生まれる。
２　授業の振り返り→「本時の板書・ワークシートなど」の記録から客観的に自分の授業を振り返る。

先日、藤井聡太四段が連勝記録を「２９」とし、話題となっています。プロの棋士は対局が終わった後に感想戦を行って、一局の山場となった部分について両者で検討をして次につなげていきます。このように振り返りをしながらよりよい手を追求していくことが、彼らの技量を保障していると言えます。
では、授業の場合は、どのようにして振り返ることができるのか考えてみたいと思います。

「授業を振り返る」３つの視点

◇第１の視点：『生徒の姿を振り返る』
授業の始まりから順に流れを思い起こして、誰がどんな発言をしたのか、それに対してどんな反応があったのかを思い返します。発言は比較的簡単に思い出すことができますが、班での活動や発言を聞いている生徒の様子を思い返すということはなかなか難しいことなので、『板書やワークシート、ノート』などを参考にします。例えば、授業後の板書を写真でパチリと記録することで、本時の振り返りの立派な材料となります。また、これを継続することで、生徒を見取る力を高めていくことができるのではないでしょうか。

◇第２の視点：『授業展開を振り返る』
自分自身で振り返るとき、先ほども述べましたが『板書の写真やワークシート』をまとめて累積しておくことで、自身の記録として後の振り返りに役立ちます。
そこで、授業を振り返る一番の機会は、第三者と振り返ることではないでしょうか。授業研究会とかではなく、普段の授業を見てもらったり、他の先生方の授業を見せてもらったりといった中で振り返ることができたら最高だと思います。プレッシャーに感じない人はいないと思います。また、自分の至らない点を指摘されることもあります。そうした助言の数々が自分の財産となって残っていくのだろうと思います。

◇第３の視点：『宿題やテストとのつながりを考える』
宿題で調べさせたことを生かして授業を展開することや、授業の発展として応用的な問題に取り組ませることなど、授業と宿題とのつながりを生かす方法は様々に考えられます。授業を振り返ってみると、宿題に求めるものも変わってくるはずです。テストについても同様で、育てたい力が身に付いたかどうかをきちんと見ることができるものにし、結果を振り返って次の授業の構想に生かすなど、授業とのつながりを大切にする必要があります。理解という点でも意欲という点でも相乗効果をもたらすことができるよう、授業と宿題やテストとの関係を固定化してしまわずに、内容や学習活動との関連から柔軟に考え、つないでいくことが必要です。

これらの視点から「授業を振り返る」ことができると思います。
ただ、その中でも『板書を写真で！』とか『授業を見せ合う！』といったことは、これまでもなかなか実践できるようでできなかったことではないでしょうか。
やはり、忙しい毎日の中で、そこまでの余裕というかゆとりといったものが……。
でも、実際に行うことができれば、自分自身の授業改善につながる有効な手立てになることは間違いないのではないかと思います。

次号では、指導案について考えてみたいと思います。
なお、別紙の資料７枚は、校長先生よりいただいた資料です。職員室後方の黒板に掲示しておきますので、見えにくい部分についてはご確認ください。